

プロローグ

甘くて苦い香りと共に楽し気で浮ついた雰囲気漂う洒落た空間の中、ひとりの俺はきっと異質で浮いているだろう。

ナッツのタルトはすでに食べてしまった。居座るためだけに残されたコーヒーはずいぶん前から冷たい。

ページをめくる手が止まる。目の前の席には一組のカップル。

二人席にひとりで座っている俺の視線を遮るものは、手にしている本しかない。線が細そうなわりに、シャツが張り付いた背中の筋肉が美しい男の人の大きな背中が少し動くたびに、幸せそうな女の人顔が見える。

テーブルの上では指を絡めてつなぐ手。並べられたお皿やカトラリーの隔たりをもろともしない彼らの距離感に、見ているこちらの胸が高鳴る。いままさに読んでいた小説の中のような情景が、目の前で起こりそうな予感。

——あれ？そこはキスじゃないのか。流れも距離感的にもキスだと思ったんだけどな。女の人はかなり期待の眼差しだったと思うけど、男の人はその気がなかったのか？なんで？うーん、わからん。

それでも満足そうなカップルに俺の疑問は増すばかりだ。
やはりリアルの人間の感情は小説のようなテンプレートな展開にはならないみたいで、最近情報収集に行き詰まりを感じている。

人の感情や欲望を知るために俺はよく人間観察をしていた。
かすかにとぎれながら聞こえてくる彼らの会話に耳を傾ける。

「……くんが、私……も、好き」

「……ありがとう」

男の人の低く優しげな声に女の人はいっとりしている。

——おお、熱烈だ。けど、「好き」に対しては「好き」と答えるのがセオリーなのでは？ そうじゃないときもあるのか。深いな。

無性愛者の俺は他人の色恋のメカニズムが気になって仕方がない。しかし、未知の世界をもっとよく知るには自分自身で体感しないとわからないこともたくさんあるのだろう。

俺にはリアル体験するための壁が高い。物理的にも感情的にも。でも知りたいという好奇心は日々増していく。俺のあくなき探究心が前へ進めとうるさいんだ。

そんな思考の波に浸っているうちに、目の前のカップルがいなくなってしまっていた。男の人が座っていた席にぽつんと残るキーホルダーが付いた鍵。リスみみたいな可愛い感じのキーホルダーが男の人の雰囲気と不釣り合いで少し笑ってしまった。

あ、てか忘れものじゃん！

レジに向かうカップルの後ろ姿が見える。
俺はすぐにキーホルダーを手に取り、声をかけた。

「あの、これ」

振り向いた男の人と目が合ったが、なんか神々しいオーラが眩しくて俺はすぐに目を逸らし、手のひらに乗せたキーホルダーを差し出す。逸らした視線の先には、白く滑らかな肌に似つかわしくないほどの男らしい首元があった。

「わざわざ、ありがとう」

やはり男の人の声はとてもやさしい穏やかなものだった。

受け取ろうと伸ばした男の人の指先が俺の手のひらに触れた時、バチッと小さな音が鳴った。突然の静電気にお互い一瞬びくったけど、なぜか離れていかない指先。くっ付いてしまったようにそこにあるから、俺の手のひらはじんわりと熱がこもっていく。

長いような一瞬のあとは、何事もなくキーホルダーが男の人のもとに返っていった。俺は軽く会釈をして、すぐに自分の席に戻る。その後ろで女の人が不機嫌そうに男の人に縋る姿は俺にはもう見えなかった。

「なに？ 誰？ 知り合い？」

「ううん。鍵、拾ってくれた」

そんなカップルの不穏な空気とは裏腹に、俺はさっきの静電気を思い出し、ちょっとにやけてしまっていた。

——静電気バチッてなった。忘れ物ありがとうとか言われて、バチッてなって、ドキドキして、普通だったらこれって恋に落ちる瞬間なのかもしれない。うわー、早く小説の続きを読もう。続きが気になる。物語のように、音が鳴るくらいわかりやすく運命と遭遇できたらすごいことだよな。まあ、そうそうそんなことは起こらないだろうけど。

自分の席に戻り、静電気が起きた手のひらを眺める。思い返すとなんだかくすぐったくなる手のひらは、その日が終わるまで何度もじんわりと熱を感じた。

バチッと音が鳴り巡り始めた血流が心臓に届くまで、温かいものが少しずつ俺を巡っていたなんてこの時は気づきもしなかった。